

# 第八章 関係詞(1)

## レクチャー1

### 関係代名詞に関する基礎知識。

#### (1)関係代名詞とは。

関係代名詞とは、文中で代名詞としての働きをしながら、同時に自身が導く節(「関係詞節」と呼ばれる)を、(直)前の名詞(「先行詞」と呼ばれる)と結びつける接続詞として働く語のことを言います。その意味では「接続代名詞」とか「接着代名詞」と言った方が、外国語学習者にはわかりやすいかもしれませんね。

「関係詞節」… 関係代名詞・関係副詞によって導かれる節

「先行詞」…… 関係詞節によって修飾される名詞 (又は代名詞)

#### (2)代表的な3種類の関係代名詞。

代表的な関係代名詞として「主格 (の関係代名詞)」「目的格 (の関係代名詞)」「所有格 (の関係代名詞)」があります。

※「補語格 (の関係代名詞)」については後述。

##### ①主格の関係代名詞

主格の関係代名詞には who と which の2種類があり、先行詞が「人」なら who、「物」なら which が使われます。

例えば、以下のような2つの英文があるとします。

I have a lot of friends.

ボクにはたくさんの友人がいる

They live in Los Angeles.

彼らはロサンジェルスに住んでいる

そしてこの2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。その場合、まず両英文中で共通項となる名詞を探すんですね。そうすると今回の場合、 a lot of

friends と(その代名詞形である) They が(両英文中に)見つかります。この(下段の英文中の)主語の They を、(主格の)関係代名詞 who に変えて(それが導く節と共に) friends の直後にもってくるのです。すると

→ I have a lot of friends who live in Los Angeles.

ボクにはロサンジェルスに住んでいるたくさんの友人がいる

と、2文が1文になるわけです。

## ②目的格の関係代名詞

目的格の関係代名詞には whom と which の2種類があり、先行詞が「人」なら whom、「物」なら which が使われます。

會口語では、whom の代わりに(目的格の関係代名詞として) who も用いられる。

これは whomever にしてもそうで、whoever で代用されることがある。

ただし前置詞と共に用いる場合は、必ず「前置詞+whom[×who]」となる。

例えば、以下のような2つの英文があるとします。

The doctor gave her the wrong advice.

その医者には彼女に間違った忠告をした

She visited the doctor.

彼女はその医者のところに行った

そしてこの2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。先程と同じ様に両英文中で共通項となる名詞を探します。そうすると the doctor が見つかります。そして下段の英文中の、目的語になっている the doctor を、(目的格の)関係代名詞 whom に変えて節頭に置き(それが導く節と共に)、上段の英文の The doctor の直後にもってくるのです。すると

→ The doctor whom she visited gave her the wrong advice.

彼女が行ったところの医者には、彼女に間違った忠告をした

と、2文が1文になるわけです。

## ③所有格の関係代名詞

所有格の関係代名詞は、(先行詞が「人」であろうが「物」であろうが) whose だけです。

例えば、以下のような2つの英文があるとします。

I want you to meet a man.

君をある男に会わせたい

The man's ambition is to become the President.

その男の野望は、大統領になることだ

そしてこの2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。これも先程と同じように、両英文中で共通項となる名詞を探します。そうすると a man と the man's が見つかります。この the man's という所有格の名詞を、(所有格の)関係代名詞 whose に変えて(それが導く節と共に)、a man の直後に持ってくるのです。すると

→ I want you to meet a man whose ambition is to become the President.

その野望が大統領になることだというある男に、君を会わせたい

と、2文が1文になるわけです。

ただ所有格の関係代名詞で注意したいのは、**所有格の関係代名詞(whose)だけは、それが修飾する名詞と必ずワンセットで文の中盤に(文をつなぐ接着剤として)移動する点**です。下の英文を見てください。

She mentioned a book.

彼女はある本について話をした

I can't remember the book's title.

私はその本のタイトルを思い出せない

上記の2つの英文を whose を用いて1文にすると、(共通項となる the book's を所有格の whose に変え、もう一方の英文の共通項である名詞 a book の後ろに、それが導く節と共に移動させ)、以下のようになります。

→ She mentioned a book whose title I can't remember.

彼女はある本について話したが、私はそのタイトルを思い出せない

ここで着目したいのが、whose とそれが修飾する名詞の title がワンセットで(つまり whose title となって)文中盤に移動している点です。これは主格や目的格の関係代名詞にはない特徴と言えるでしょう。

文法問題における関係代名詞の格の決め方。

実際英文法問題において、関係詞を苦手とする受験生が悩むのは、「どの(格の)関係代名詞を正解として選択するか？」ですね。

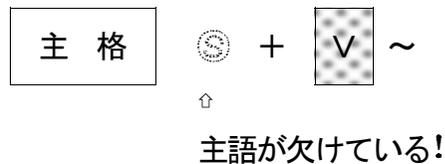
一言で、正解を導くための原則を表現すれば、以下のようになります。

「関係代名詞の格は、後続の(関係詞)節内の欠けている格と一致する」

それではそれぞれの格の関係代名詞について、具体的に見ていくことにしましょう。

(1)主格の関係代名詞。

主格の関係代名詞(先行詞が「人」ならwho、「物」ならwhich)は、直後に(主語の欠けた)「動詞」を取るのがその特徴です。



以下の英文で確認してみましょう。

(ex) Look at the man who is reading a book over there.  
主格    V

向こうで本を読んでいる男性を見てごらん

確かに、主格の who の後ろには、主語の欠けた、動詞で始まる(不完全な)文がきていますね。つまり、関係代名詞である who の格(「主格」)は、後続の(関係詞)節内の欠けている格と一致しているというわけです。

(2)目的格の関係代名詞。

目的格の関係代名詞(先行詞が「人」ならwhom、「物」ならwhich)は、直後に(目的語の欠けた)「S + V」を取るのがその特徴です。



代名詞である whose の格(「所有格」)は、後続の(関係詞)節内の欠けている格と、これまた一致しているというわけです。

(4)( ) S+V V~型(連鎖関係詞節)。

文法問題で、空欄の直後が「**S+Vt V~**」(**Vt**の部分には「**言う(say)**」「**思う(think, know, believe, suppose など)**」型の動詞がくる)という構造になっていることがあります。

(ex) I saw a woman ( ) I thought was a friend of my mother's.  
S Vt V

このような場合、空欄には主格の関係代名詞が入ります。上の英文の場合、(先行詞が「人(a woman)」なので) who が入ります。意味は「母の友人だと(私が)思った女性を私は見かけた」となります。



→ I saw a woman who I thought was a friend of my mother's.

上記の英文を、元の別々の2つの文に戻してみれば、以下のようになります。

I saw a woman.

I thought (that) she[=the woman] was a friend of my mother's.  
S

こうして元に戻してみると先程の英文は、thought の目的語である that 節中の主語(she[=the woman])が関係代名詞(who)になって節頭に移動し、(それが導く節と共に)先行詞の a woman の後ろに置かれた文だったことがわかります。

このタイプの応用形として、空欄の直後が「**S+Vt S+Vt~**」(**Vt**の部分には同じように「**言う(say)**」「**思う(think, know, believe, suppose など)**」型の動詞がくる)という構造になっているものがあります。



1. I have a friend ( ) can sing a song very well.

- ① who      ② whose      ③ whom      ④ which

【角筈言説】 空欄直後に、主語の欠けたいきなり動詞ではじまる文がある。したがって空欄には主格が入る。直前には、a friend という「人」を表す名詞【先行詞】がある。正解は①。

【訳尺】 「私には歌がとって上手な友人がいます」

2. The cat ( ) color is black and white is mine.

- ① who      ② whose      ③ whom      ④ which

【角筈言説】 空欄直後に、所有格の欠けた名詞がある。したがって空欄には所有格が入る。直前には、正解は②。

【訳尺】 「色が黒と白(のぶち)のそのネコは私のです」

3. She is the girl ( ) you can trust.

- ① why      ② whose      ③ whom      ④ which

【角筈言説】 空欄直後に、(動詞 trust の)目的語の欠けた文がある。したがって空欄には目的格が入る。正解は③。

【訳尺】 「彼女は君が信頼できる女の子だ」

4. The boy ( ) I thought to be your brother was a stranger.

- ① why      ② whose      ③ whom      ④ which

【角筈言説】 空欄直後に、(動詞 thought の)目的語の欠けた文がある。したがって空欄には目的格が入る。正解は③。  
ちなみに think O to be Cで「OをCとみなす」。

【訳尺】 「私が君のお兄さんだと思ったその少年は、赤の他人だった」

5. She was an actress ( ) I thought was so attractive.

- ① who      ② whose      ③ whom      ④ which

【角筈言説】 空欄直後に、S+Vt Vという構造がある。空欄には主格が入るとわかる。空欄の前には an actress という「人」を表す名詞がある。正解は①。

【言尺】 「彼女は、とても魅力的だと私が思った女優だった」

### レクチャー3

#### 関係代名詞の that。

関係代名詞の that は、主格(who/which)、目的格(whom/which)の代用としてよく用いられます。つまり先程、主格、目的格の関係代名詞のところで紹介した例文は、以下のように that を用いて表現することも可能なのです。

→ I have a lot of friends **that** live in Los Angeles.

ボクにはロサンジェルスに住んでいるたくさんの方がいる

→ The dog **that** I like belongs to Tom.

ボクが好きなその犬は、トムの(飼っている犬)だ

⚠that が whose の代用になることはない。

このように非常に便利な関係代名詞 that ですが、それだけに that に関しては以下の注意すべきポイントを、しっかりおさえておく必要があります。

(1) (関係代名詞が) that でなければならない場合。

① 先行詞が「人+人以外」のとき

以下の英文を見てください。

(ex) The people and customs **that** the reporter had described was unfamiliar to most of the Westerners.

その記者が述べた人々や習慣は、ほとんどの西洋人にはなじみのないものだった

この英文で、(関係代名詞の)先行詞は波線部の The people and customs、つまり「人+人以外」です。この場合、関係代名詞は that しか使えません。

## ②先行詞が疑問詞(who や which など)のとき

以下の英文を見てください。

(ex) Who that has pride in him can stand such treat?

自分に誇りを持っている誰がそんな扱いに我慢できるだろうか

(いやできない)

この英文で、先行詞は波線部の Who、つまり「疑問詞」です。この場合、関係代名詞は that しか使えません。(関係代名詞は「主格」。そして先行詞の who は「人」を表わすものなのですが) Who who ~? としては、やはり語感が悪いからです。

## ③先行詞に特定の形容詞がついている場合

會ただし、現実には「物・事」には which、「人」には who, whom が用いられることが多い。

### 1.最上級

(ex) She was the most attractive lady that I saw at the party.

彼女は、私がそのパーティーで見た最も魅力的な女性だった

### 2.序数、the same(同じ)、the only(唯一の)、the very(まさにその)

(ex) She was the first person that came to the village.

彼女はこの村にやって来た最初の人だった

You have made the same mistakes that you made last time.

君は前と同じ間違いをしている

This is the only food that I have with me.

これは、私が持っている唯一の食べ物です

It is the very book that I lost yesterday.

それは、私が昨日なくしたまさにその本です

### 3.all、every、any、no など

(ex) The word 'vegetable' means anything that comes from plants.

vegetable という言葉は草木から生じるあらゆる物を意味している

I sold all the books that I had in my house.

私は家にあった全ての本を売ってしまった

#### ④関係代名詞の補語格は that になる

元々補語だった語が関係代名詞になった場合、それは that で表します。

例えば以下のような2つの英文があるとします。

Catherine is not the excellent swimmer.

She was an excellent swimmer.

S V C

そしてこの2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。その場合、まず両英文中で共通項となる名詞を探すんですね。そうすると excellent swimmer が見つかります。そしてこの excellent swimmer は、英文中で S V C の「C」、つまり補語になっています。したがってこれを関係代名詞の that に換えて節頭に移動し、(その導く節と共に)先行詞の直後にもってくるのです。すると

→ Catherine is not the excellent swimmer that she was.

キャサリンは今では(彼女が昔そうだったような)優秀なスイマーではない  
となるわけです。

④補語格の関係代名詞の先行詞は、人そのものではなく、人の地位・職業・性格などになることが多い。また、補語格の that は省略されやすい。

補語格の that を用いた英文を、もう少しあげてみることにしましょう。

(ex) Jack isn't the man that he was.

ジャックは昔の彼ではない

She is not the brilliant gymnast that she used to be.

彼女は以前のような見事な体操選手ではない

ただし、(いくら補語格でも)直前にカンマがあった場合には which を用います。

(ex) His father was an able businessman, which[~~x~~that] he is not.

彼の父親は有能な実業家だったが、彼はそうではない

Nancy appeared to be experienced, which[~~x~~that] she was.

ナンシーは経験豊かに見えたが、事実そうだった

(2) that はカンマや前置詞が直前にあつたら使えない。

that はとても便利な関係代名詞なのですが、直前にカンマ(,)、前置詞があると使うことができません。例文で確認してみましょう。

(ex) Ben received a letter from Mary, which[xthat] he read again and again.

ベンはメアリーから手紙を受け取って、それを何度も何度も読んだ

The woman with whom[xthat] he was arguing was his boss.

彼が口論をしていた女性は彼の上司です

#### レクチャー4

「その屋根の見える家が、スミスさんの家です」が、関係代名詞を用いて2パターンできる理由。

それは、上記の日本語の「その家の屋根」の部分が、2種類の表現ができるからです。以下の2つの英文を見てください。

① The house is Mr. Smith's.

その家はスミスさんの家です

② You can see it's[=the house's] roof.

その家の屋根を見ることができる

この2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。

②の英文では、「その家の屋根」を it's[=the house's] roof と、所有格で表しています。そこで、その it's[=the house's] の部分を所有格の whose に換え、whose roof とし、これを節頭に移動させ、(それが導く節と共に)先行詞となる The house の直後に置いて、以下のように1文でまとめることができます。

→ The house whose roof you can see is Mr. Smith's.  
S V C

會所有格の関係代名詞(whose)だけは、それが修飾する名詞と必ずワンセットで文の中盤に(文をつなぐ接着剤として)移動するんだった。

次に、もう1パターン、先程と同じ意味の2つの英文です。

① The house is Mr. Smith's.  
その家はスミスさんの家です

② You can see the roof of it[=the house].  
その家の屋根を見ることができる

ただし、(①は全く同じですが)②の英文は、「その家の屋根」を the roof of it [=the house] と表しています。

では、この2文を関係代名詞を用いて1つにしようと思います。その場合、the roof of it[=the house] の it[=the house] を which に換え、the roof of which とし、これを節頭に移動させ、(それが導く節と共に)先行詞となる The house の直後に置いて、以下のように1文でまとめることができます。

→ The house the roof of which you can see is Mr. Smith's.  
S V C

Ⓢ 「A of B」の「B」が whom[which] となった場合、「A of whom[which]」という形で、必ずワンセットで2文をつなぐ接着剤として文中盤に移動する。

これは、元々の A of との意味的な結びつきが強すぎてバラバラにできないと考える。A of whom[which] でワンセットの関係代名詞として機能する。

## レクチャー5

### 関係代名詞の what。

#### (1) what の基本とその特徴。

下記の2つの英文を比べてみて下さい。

① This is the cake which I made.  
先行詞 関・代

② This is the thing which I made.  
先行詞 関・代

①の方は、先行詞が the cake とはっきりしているのに対して、②の方は the thing と漠然としています(その「もの(the thing)」がなんなのかわからない)。

このように先行詞がはっきりしない the thing, that などの場合に、その先行詞と関係代名詞(which)をまとめて一語で表したのが、実は what なのです。

This is the thing which I made.

先行詞 関・代



This is what I made.

ここから、what に関する以下のような特徴が生まれました。

①what は「thing(s)+which」「that+which」のことであり、先行詞を自身の中に含んでいる関係代名詞である。従って what を用いた文に先行詞は存在しない。

②訳し方は「こと」「もの」と訳す。

以下の問題の空欄に何が入るか分かりますか？

This machine is the thing ( ) I have long wanted.

問題文の意味は「この機械は、私が長いこと欲しかったものだ」です。

これまでなら「『もの』と訳せるなら what」と、安直に what を入れてしまっていたかもしれませんが、よく見ると空欄の前に the thing という先行詞があります。ここから what は入ることができないとわかります。

正解は、「物・事」を表す名詞を先行詞に取る which[又はその代用としてのthat]です。

③what の導く節は基本的に名詞節になる、つまり文の主語、補語、目的語になったり、前置詞の後ろに置かれたりする。

(ex) What he said is true.

S V C

彼が言ったことは本当だ

I don't know what you mean.

S V O

私はあなたの意図がわからない

The result was different from what they had expected.

【前置詞の目的語】

その結果は、彼らの予想したこととは異なっていた

(2)what を用いた慣用表現。

what を用いた慣用表現は、大学入試などでは超頻出です。以下は全てマスターしましょう。

①what we[you,they] call 「いわゆる」

=what is called

(ex) Our boss is what is called a self-made man.

うちの上司は、いわゆる腕一本で成功した

②what S is 「現在のS(の姿、性質)」

(ex) Her mother made her what she is.

彼女の母親が、彼女を現在の彼女にせしめた

③what S was[used to be] 「昔のS(の姿、性質)」

(ex) He is not what he was.

彼は昔の彼ではない

④what S will be 「未来のS(の姿、性質)」

(ex) I often imagine what my sons will be.

私はよく息子たちの将来を想像する

⑤what S should be 「本来あるべき(理想の)S(の姿、性質)」

=what S ought to be

(ex) Miss. Brown is what a lady should be.

ブラウンさんは理想的な女性だ

⑥what S seem to be 「見かけのS(の姿、性質)」

(ex) We tend to judge a person by what he seems to be.

私達は人を見かけで判断しがちだ

⑦what is 比較級 「更に～なことには」

(ex) It was blowing very hard, and what was worse, it began to rain.

風がひどく、おまけに雨まで降りだした

⑧what is more 「おまけに」

(ex) Jack is well off, and what is more, he is of good birth.

ジャックは金持ちで、おまけに名門の出だ

⑨A is to B what[as] C is to D 「AとBの関係はCとDの関係と同じだ」

(ex) Reading is to the mind what food is to the body.

読書の精神に対する関係は食物の身体に対する関係に同じである

⑩what with A and (what with) B 「AやらBやらで」

(ex) What with the heat and humidity, I could not sleep well.

暑いやらむしむしするやらで、私はよく眠れなかった

レクチャー6

関係副詞 (where, when, why, how)。

(1)関係副詞とは。

関係副詞とは、文と文をつなぐ接続詞[接着剤]の働きと、副詞の働き、両方の機能をもつ品詞です。以下でわかりやすく関係代名詞との違いを説明しましょう。

①関係代名詞を使って2つの文を1つにする場合。

関係代名詞を用いて、以下の2つの英文を1つにしようと思います。

That is the house.

We lived in the house.

共通項となる名詞は the house。これを which に変えて以下のようにまとめます。

That is the house. + we lived in the house.

↓

which

→ That is the house **which** we lived in.

上記の英文は、以下のようにも表現できます。

= That is the house we lived in. ← 関係代名詞の目的格は省略できる！

∧

= That is the house **in which** we lived. ← 関係代名詞直前の前置詞とその関係代名詞が、ワンセットで文中盤に、2文をつなぐ接着剤として移動することもある。

②同じ英文を、関係副詞を使って1つにする場合。

全く同じ2つの英文を、今度は関係副詞を用いて1つにしようと思います。  
まず in the house は、場所を表す副詞 there(そこに)一語で言い換えられますね。

We lived in the house.

↓

there

この場所を表す副詞の there に、文と文を接着する機能がつけ加わったのが where という(先行詞が「場所」を表す名詞の場合に用いられる)関係副詞で、there をこの where に変え、節頭に移動し(それが導く節と共に)先行詞の後ろに移動させます。

We lived in the house.

↓

there

↓

where

そうすると、以下のように1つにまとまるわけです。

→ That is the house **where** we lived.

## (2) 4つの関係副詞とその先行詞。

関係副詞は、先行詞の種類（「場所」「時」「理由」「方法」）によって使われるものが決まっています。

### ① 先行詞が場所 → where

※「場所を表す前置詞(at[in/on等])+名詞」が where になる。at[in/on等] which で書き換えられる。

### ② 先行詞が時 → when

※「時を表す前置詞(at[in/on等])+名詞」が when になる。at[in/on等] which で書き換えられる。

### ③ 先行詞が理由 → why

※「理由を表す前置詞(for)+名詞」が why になる。for which で書き換えられる。why を for which で書き換えさせる問題は時々あるので注意。なお、理由を表す先行詞の大半は reason(又はcause)。

### ④ 先行詞が方法 → how

※「方法を表す前置詞(in)+名詞」が how になる。in which で書き換えられる。how を in which で書き換えさせる問題も時々あるので注意。なお、方法を表す先行詞の大半は way(又はmanner)。

## (3) 関係副詞の先行詞の省略。

関係副詞の、(関係代名詞にはない)特徴として以下があげられます。

「特に where, when, why の先行詞が、それぞれ the place, the time, the reason などの(推測しやすいものだった)場合には、それらの先行詞が省略されてしまうことが多い。また逆に、関係副詞自身が省略されてしまうこともある」

以下の例で確認してみてください。

### ① where

This is the place where we live now.

=This is where we live now.

=This is the place we live now.

これが私たちが今住んでいるところです

### ② when

I remember the time when we met each other for the first time.

=I remember **when** we met each other for the first time.

=I remember **the time** we met each other for the first time.

私達がおたがい初めて会った時を私は覚えています

### ③why

This is **the reason why** I was absent from school.

=This is **why** I was absent from school.

=This is **the reason** I was absent from school.

こういうわけで私は学校を休みました

### (4)the way[manner] と how。

関係副詞の中で **how** だけは、(他の関係副詞とは異なり)先行詞か **how** 自身のどちらかを必ず省略しなければならないというルールがあります。つまり「**the way [manner] how S + V ~**」という形はありません。

ただ、**how** は **in which** で書き換えられるので「**the way[manner] in which**」というのは O.K. です。

That is the way. **それがその方法です**

They stole it from the store **in the way**. **その方法で彼らはそれを店から盗んだ**

したがって、上記の2つの英文を関係副詞で1文にするとすると、以下のように書き換えられるわけです。

→ That is **how** they stole it from the store.

**そういうふうにして彼らはそれをその店から盗んだ**

= That is **the way** they stole it from the store.

= That is **the way in which** they stole it from the store.

決して以下のように、**the way** と **how** の両方を英文中に残してはいけません。

× That is **the way how** they stole it from the store.

會「関係副詞は **that** で代用できる」というルールがあり、以下のような表現もありうる。

→ That is **the way that** they stole it from the store.

※関係副詞の when, why, how は、that で言い換えられる。

where については、先行詞が the place の場合は、that で言い換えられる。  
それから that の場合、先行詞が省略されることはない。

## レクチャー7

### 関係副詞関連でよくあるタイプの問題。

以下の空欄に関係詞を補って下さいと言われたら、さて何を入れたらいいでしょう。

① This is the place ( ) I lived in three years ago.

② That is the reason ( ) prevented me from coming in time.

関係詞に苦手意識を持つ多くの学習者が、①には where を、②には why を正解としてしまいます。

ところが正解は、共に関係代名詞の which[that] で where や why ではありません。実は、関係代名詞とそれ以外ではその後続く形に決定的な違いがあるのです。

下の図のように、**関係代名詞だけは直後に「不完全な文」を導く**というルールを覚えておいてください。。

④「不完全な文」とは、S(主語)、O(目的語)、C(補語)、所有格のうちのどれか一つが欠けた文のこと。

そうすると、①の空欄直後の英文には、場所を表す前置詞 in の後にあるべき(場所を表す)名詞がありません。つまり前置詞の目的語が欠けた不完全な文です。②の場合、空欄の直後の文には主語が欠けています。これもまた不完全な文です。この点から ①、②共に空欄には関係代名詞しか入れないのです(で、直前の先行詞が共に「物」を表す名詞なので which、もしくはその代用としての that が正解となる)。



「場所」をイメージさせる)。

(ex) This is **the point** where you're wrong.  
ここがあなたがまちがっている点だ

◎関係副詞は、その先行詞、又は関係副詞自身を省略することができるので、上記の英文は以下のようにも書くこともできる。

→ This is **where** you're wrong.

→ This is **the point** you're wrong.

②where には接続詞的な用法もある。

1.at[to] the place where と同じ意味の where 「～な場所で[に]」

(ex) The tribe live by themselves **where** ordinary people cannot live.  
その部族は、普通の人が生活できないような場所で生活している

2.in cases where と同じ意味の where 「～な場合には」

(ex) **Where** there is a will, there is a way.  
意志あるところ道は開く

(2)when は先行詞と離れて置かれることがある。

(ex) Will **the day** soon come **when** we can make a trip to the moon?

【先行詞】

我々が月旅行をできる時がすぐくるでしょうか

(3)「This is why～」と「This is how～」。

これらの表現については、以下のように決まり文句的に考える[訳す]ようにする  
といいでしょう。

①This is why[the reason] S+V～ 「こういうわけで～」 【理由】

(ex) He caught cold. **This is why** he cannot attend the meeting.

彼は風邪をひいたのです。こういうわけで彼は会合には出席できません

②This is how[the way] S+V～ 「こういう[こんな]ふうにして～」 【方法】

(ex) **This is how** he solved the problem.







This is the reason for which I did not go.

これが私が行かない理由です[こういうわけで私は行かないのです]

しかしこれも、元々 reason と for が相性がいい(セットで使われるものである)ことが知識として入っていないと、解ける問題ではありません。

このように、「前置詞+関係代名詞」の問題は、後続の動詞(あるいは直前の先行詞)と、どの前置詞が結びつきうるのかがわからないと答えは出ないわけで、イディオムや語法の知識が必要となる場合が多いのです。

### 「前置詞+関係代名詞」についての補足事項

以下は参考までに載せたのみで、特に絶対覚えるべきものというわけではない。

#### ① 「前置詞+関係代名詞」の形で用いられ、文尾に置くことはできない前置詞。

(a)round「～のまわりに」	despite「～にもかかわらず」	inside「～の内側に」
as to「～に関して」	during「～の間」	near「～の近くに」
because of「～の故に」	down「～の下の方へ(に)」	next to「～の隣に」
besides「～以外に」	except「～を除いて」	opposite「～の反対に」
concerning「～に関して」	in front of「～の前に」	outside「～の外側に」
regarding「～に関して」	since「～以来」	up「～の上の方に」

また「前置詞+名詞」の形で様態を表す副詞句の中の名詞の部分が取り出されて先行詞になる場合がある。このような場合、前置詞と名詞の結びつきが強いので、必ず「前置詞+関係代名詞」の形にする。以下にその代表例をあげてみる。

in the manner[way]「そのように」	with fluency「流暢に」
with care「慎重に」	in the mood「～の気分で」
with ease「簡単に」	to the degree[extent]「その程度まで」
with rapidity「迅速に、素早く」	

(ex) I was surprised at the rapidity with which Tom solved the problem.

トムがすぐにその問題を解いてしまったことに驚いた

The most important thing is the extent to which the measure is effective.

一番大事なことはその対策がどの程度効果的かだ

②逆に前置詞を必ず文尾(関係詞節の末尾)にしか置けない場合として、「動詞+前置詞」等の熟語などの場合があげられる。これは前置詞とその動詞との結びつきが強いので、「動詞+前置詞」を切り離すことができないからだ。

(ex) ○ My mother was not a man whom I could look up to.

× My mother was not a man up to whom I could look.

母は、私が尊敬することができないような人物だった

☞look up to Aで「Aを尊敬する」。

○ The breakfast she cooks is something which I can't do without.

× The breakfast she cooks is something without which I can't do.

彼女の作る朝食は、私には欠かせないものだ

☞do without Aで「Aなしで済ます」。

## レクチャー10

### 関係詞の非制限用法[継続用法]。

(1)「制限用法」と「非制限用法[継続用法]」の意味の違い。

以下の2つの英文の違いがわかるでしょうか。

① I like dogs which are friendly[ひとなつこい]。 [制限用法]

② I like dogs, which are friendly. [非制限用法[継続用法]]

①は、関係詞節(which ~ friendly)が先行詞(dogs)を修飾することにより、先行詞の表す内容を制限[限定]しています。直訳は「私はひとなつっこいな犬が好きだ」でよいのですが、ということは暗に「それ以外(よく吠える、臆病な…など)の犬もいる」ことも示唆する(そして「ひとなつっこくない犬は好きではない(つまり嫌いだ)」という)、(言外の)意味がそこに含まれてしまうわけです。

②は、関係詞節の直前にカンマ(,)が置かれることで、先行詞(dogs)は関係詞節によって修飾されません。つまり関係詞節が先行詞の表す内容を制限[限定]していないわけです。このような用法を、非制限用法[継続用法]と言います。英文の

意味は「私は犬が好きだ。それは犬はひとなつっこいだからだ」となります。つまり、全ての犬はひとなつっこいということを暗に示しています。このことが理解できると、以下の英文はどちらが正しいかが見えてくるはずです。

① I'm planing to visit my only son who lives in Hiroshima now.

② I'm planing to visit my only son, who lives in Hiroshima now.

もちろん正解は②です。①の場合、「今広島に住んでいる一人息子のところに行こうと計画している」と、和訳だけ見るとよさそうなのですが、who節(関係詞節)で my only son を制限[限定]してしまうと、暗に「(訪ねる計画はない)今広島に住んでいない一人息子」がいることを示してしまうことになるからです。

②の場合、who節(関係詞節)によって my only son は制限[限定]されず、「私は一人息子とのところに行こうと計画しているのだが、彼は広島に今住んでる」という訳になります。

## (2)関係代名詞の前にカンマ(,)がついていた場合のポイント。

①カンマ(,)で一旦区切る(関係詞節を前の先行詞にかけて訳さない)

②カンマ(,)を接続詞(and, but, because, though)とみなして訳す  
彙どの接続詞とみなすかは前後の意味関係で自分で判断する。

③関係代名詞は、単なる(直前の先行詞を指す)代名詞とみなして(あるいは先行詞をそこに代入して)訳す

(ex) I love my car, whose color is my favorite.

上の英文では、まずカンマの前までを(「僕は自分の車が好きです」と)訳し、そこで一旦区切り、カンマを because とみなしてその後の訳を続けるとうまくつながります。そうすると訳は「ボクは自分の車が好きです。なぜなら、その色がお気に入りだからです」となります。

基本的には非制限用法[継続用法]の場合、上記のルールのようにカンマで一旦区切るのですが、ただ以下のように関係詞節が(2つのカンマやダッシュにはさまれて)文中に挿入されている場合には、単に先行詞を補足しているのみで、ふつうに先行詞にかける訳をしてもかまわないこともあります。この場合にはカンマをあえて接続詞的に訳す必要もありません。

(ex) My father, who is a scholar, is now in New York.

私の父は学者ですが、今ニューヨークにいます

上の英文は who is a scholar の部分は2つのカンマにはさまれ、挿入的に用いられているので、普通に先行詞の My father にかけて「学者であるうちのお父さん」と訳せばいいのです。

#### ④ 「,+which」 は前の英文全部(又はその一部)を先行詞に取ることもできる

すべての「,+which」が前の英文を先行詞に取るわけではありません。場合によっては取ることもあるという意味です。そんな前の英文全部を先行詞に取った例が下の英文です。

(ex) All the Students respect Mr. Black, which I find natural.

学生たちはみなブラック先生を尊敬しているが、私はそれは当然だと思う

上の英文の which の先行詞は Students~Black まで全体です。

また「形容詞」を先行詞にとる「,+which」もあります。例文をあげておきます。

(ex) Everybody thought the woman young, which she was not.

[先行詞]

みんなその女性が若いと思ったが、そうではなかった

#### (3) 「,不定代名詞+of+目的格(whom[which])」。

不定代名詞とは some, any, few, many, enough, none, all, both, several などのことを指して言います。

以下の英文を見てください。

(ex) He has three daughters, all of whom live in America.

彼には3人の娘がいるが3人ともアメリカに住んでいる

このように of という前置詞の後ろなので、関係代名詞は目的格にするのがポイントです。つまり上記の英文は、元は以下のような2つの文だったわけです。

He has three daughters.

All of them[=the daughters] live in America.

このように元の英文でも、of の後ろで代名詞は目的格の them になっています。そして「不定代名詞+of+目的格(whom[which])」は、これ自体をワンセットで

1つの関係代名詞と考えるので、その後ろには「不完全な文」がくる点に注意して下さい。

of+目的格(whom[which])の部分が「前置詞+関係代名詞」だからといって、後ろに「完全な文」を予想してはいけません。

#### (4) 「,+関係副詞」。

関係副詞で直前にカンマがつく(つまり「,+関係副詞」となる)のは、where と when のみ。逆に言えば「, why」「, how」という言い方はありません。

「, where」は「接続詞+there(そこで)」「, when」は「接続詞+then(その時)」と考えるとよいでしょう。

(ex) He went to Paris, where he first met her.

彼はパリに行き、そしてそこで初めて彼女に会った

=and there

I was about to leave, when there was a knock on the door.

私はちょうど出かけようとしていた。とするとそのときドアをノックする音が聞こえた

=and then

會カンマ(.)をどの接続詞の代用とみなすかについては、and/but/because のいずれかで考えてみる。最終的にどれで訳すかは、文脈判断となる。

(5)非制限用法(つまりカンマが前についたら)の関係代名詞は、たとえそれが目的格でも省略することはできない。

(ex) I received a long letter from Jack, which I read again and again.

ジャックから長い手紙を受け取り、私はそれを何度も何度も読んだ

上の英文の which は目的格(先行詞は letter)ですが、直前にカンマがある(つまり非制限用法)であるため、省略することはできません。

× I received a long letter from Jack, I read again and again.

(6)制限用法(カンマなし)と非制限用法(カンマあり)の先行詞の違い。

①制限用法の先行詞 ⇒ 「不特定の人・物」。

(カンマなし) 會關係代名詞の導く節に修飾されて初めて、それが誰[何]を指しているのかがわかる場合が多い。  
(ex) I like a person who is kind to old people.

②非制限用法の先行詞 ⇒ 「特定の人・物(1つしかないもの)」やグループ全体を指す「(the+) 名詞」。

## 《まとめ》

會選択肢が関係詞だったら、キーワードは「後ろを見てから、前を見よ!!」。  
つまり

(1)( )の後ろが「完全な文」なのか「不完全な文」なのか?

①後ろに「不完全な文」を導くのは関係代名詞だけ。

②「関係副詞」「前置詞+which[whom]」「接続詞」は後ろに「完全な文」を導く。

※「A(名詞)+of+which[whom]」でワンセットで関係代名詞の働きをするものには注意。後ろに「不完全な文」を導く。

(ex) Look at the car the roof of which is shining.  
[名詞+of+関係代名詞] [不完全な文]

※「前置詞+what」の後ろには「不完全な文」が続くので注意。

③「不完全な文」なら、どの関係代名詞が入るかも、「後ろの形」で決定する。

※一言で言えば、「関係代名詞の格は後続の(関係詞)節内の欠けている格と一致する」。詳しくは「レクチャー2」を参照せよ。

(2)次に( )の前に先行詞があるのかないのか?

①先行詞なしで使える(逆に言えば先行詞があれば使えない)関係代名詞は以下の2つしかない。

1.what

2.関係代名詞+ever ㊦ whoever, whichever, whatever 等。

つまり、空欄の後ろが「不完全な文」で、空欄の前に先行詞になれそうな名

詞がなければ、上記の2つのどちらかが空欄に入ることになる。

特に what が導く節は(「wha we call:いわゆる」等の決まり文句を除いて)基本的にS・O・Cのどれかになる。

②逆に先行詞があるならそれは「人」なのか「もの」なのかが who, whom と which の入れ分けの決め手になる。

③( )の前に「前置詞」や「,」があったら、正解に(関係代名詞の) that は、もうあり得ない。

④関係副詞が入ると断定できた場合は、関係副詞は、先行詞が「場所」なら where、「時」なら when、「理由(reason,cause)」なら why と、決まっているので分かりやすい。

⑤the way[manner] how S+V～ という形はない。以下のいずれかで表す。

1.the way[manner] S+V～

2.how S+V～

3.the way[manner] in which S+V～

⑥「,+関係副詞」となるのは when と where だけ。逆に言えば「, why」「, how」という言い方はない。